大利根分館の歩み

糠　谷　　隆

大利根分館の生い立ち

大利根分館の前身である県立大利根博物館は、県立地域博物館の第５館目として昭和54（1979）年11月に開館した。県北東部の香取・海匝などの東下総地域の総合博物館であるとともに、利根川の自然と歴史・千葉県の農業等に特に重点をおく博物館として、平成18（2006）年３月に県立中央博物館の分館となるまで様々な展示・調査研究・資料収集保管を行ってきた。

主な収蔵資料としては、県指定有形民俗文化財「利根川下流域の漁撈用具」・利根川高瀬船に関連する「舟運関係資料」・利根川東遷による新田開発がもたらした「低湿地稲作農具」・商都佐原の大店「奈良屋商業関係資料」・利根川下流域の「野鳥標本」・在来種を多く含む「稲品種標本」等多岐にわたっている。

県指定文化財「利根川下流域の漁撈用具」（一部）

館庭に再現した「帆引き船」（昭和56年６月）

大利根分館歩み始める

大利根博物館は、当時７～８名の職員で活動してきたが、分館になった平成18年度は学芸職員２名体制の通年開館、平成19年度からは年度前半の半年開館、年度後半は事前予約団体向けの開館となり、現在も続いている。常駐職員は平成19年度から22年度までは年度後半は１名が続いた。平成23年度から再び通年２名となり、25年度から３名に、29年度は再任用職員３名を含む５人態勢となった。平成30年度は４人体制で分館化当初よりも充実している。

半年開館を利点に！

平成19年度から続く半年開館（半年休館）をマイナス材料と捉えず、通年２人常駐となった平成23年度から小学３年生社会科の「古い道具と昔のくらし」単元にあわせ、収蔵している民俗資料から関連資料約80点を選び、利用希望の学校に出向いて展示・授業を行う「出前展示」を積極的に展開し、29年度は38校を訪ねた。

平成29年度からは、120万人を超える利用者がある「道の駅水の郷さわら」で「佐原の大祭」や「水郷の野鳥」などの写真展を開催し、集客に努めている。また、さわやかちば県民プラザにおいても受託資料「寺田家文学資料」による「利根川と文学」展を開催した。

「古い道具と昔のくらし」出前授業風景

本館との連携強化

連携事業としては、中央博本館の持つ収蔵資料や専門的かつ豊富な学芸資源を相互に活用し、「深海の生きものたち」・「妖怪になった動物たち」など、分館夏休み展示を本館研究員と協力して開催してきた。

「プールの生きもの」香取市立新島小学校（平成30年５月）

今後は、近隣小・中学校との博学連携事業（写真上）や川のフィールドミュージアム「いきもの調査隊」「水郷民俗調査隊」なども含め、さらなる連携強化に努めていきたい。

（大利根分館）